学 位 論 文 要 旨

氏 名 山本 淳子

題 目 A Study on the Effects of CALL Environments on the Motivation
of Japanese EFL University Students

技術革新によりEFL学習者を取り巻く環境はデジタル化が進み、タブレットや携帯電話といったモバイルデバイスも教室内外の学習に取り入れられている。本研究はこのような状況の中、どのようなCALLの機能が、CALL環境で学ぶ大学生の意欲に肯定的、否定的影響を及ぼすのかを主要な動機づけ理論・概念を参照して明らかにし、CALLと学習意欲の関係を検証することを目的としている。これまでのコンピュータ支援言語学習（CALL：Computer-Assisted Language Learning）と学習意欲の関係においては、特定の教育的介入が学習意欲に及ぼす影響を調査した研究が主流であったが、本研究では、CALL環境の中で学ぶ大学生がこれまでの研究で示されているCALLの特性（真正性、新奇性、ゲーム性、インタラクティブイティなど）をどのように捉えているのか、それらが学習意欲にどう影響しているのかを質的・量的に調査し、学習意欲に結びつくCALLのあり方を探った。

第1章で筆者は、EFL学習者のモチベーションの低下という問題を提示し、その解決に向けたCALLの活用を提案した。

第2章の動機づけとCALLの2つのテーマを扱った文献調査で、学習環境の研究が不足していることに言及し、本研究のテーマとした。学習環境の研究では、主としてオンライン学習やCALL環境の中で、学習者がどうやってやる気を出したり、なくしたりするのか、それはなぜなのかという現実を深く見る（Hartnett, 2016）ことを目指す。COVID-19パンデミックによる緊急遠隔授業によって、CALLの環境にWeb会議システムによるオンライン授業が加えられた。また、オンライン留学やオンライン国際交流という環境も身近なものになったため、これらの環境が学習意欲に及ぼした影響についても分析の対象とした。

第3章の研究方法で、各章の研究のプロセスを明確にした上で、第4章では、ニーズ分析をもとにeラーニングについての質問を作成し、自己決定理論、L2動機づけセルフシステムなどに基づく動機づけに関する尺度に加えた。この質問紙は第5章と第7章の量的研究で使用した。

第5章では、CALL関連変数と動機づけ変数の関係を調査し、どのようなCALLの要素が内発的動機づけや自己決定度の高い同一化的調整を予測するのかを明らかにした。その結果参加者（N=79）においては、同一化的調整（IR）は、内発的動機（IM）とともにすべてのCALL関係の変数と有意な相関があり、IRとIMの重要性が示された。

相関分析では、習熟度が上位群よりも下位群の学生にとって、eラーニングの影響が大きかった。COVID-19中の参加者の調査結果を多変量分散分析にかけたところ、1年生では、動機づけに項目に加えeラーニングがIMやIRの予測因子だった一方、2年生では、L2理想自己がIMやIRの予測因子であった。このことから、ERTは、特に1年生の学習意欲にポジティブな影響を与えていたことが示唆された。

第6章ではこれらの結果を検証するためにオンライン授業を経験した22人の参加者に対し、CALLについてのインタビューの結果を分析した。1回目の調査で判明した傾向をさらに明確化すること、緊急遠隔授業直後から、一年弱後の対面授業においての変化を捉えるため2回目のインタビューを行い、1回目の分析と比較した。

参加学生は、1回目に比べ2回目のインタビュー時にはICTスキルが高くなったために自信を身につけ、それが学習意欲につながっている様子が確認された。オンライン授業に関しては、全員が対面授業に比べ理解度が劣ると回答したが、2回目では、オンライン授業に慣れたことでより深い学習を進められたこと、不自由な環境の中でもICTスキルを生かして、クラスメートと協力しながら英語のスキルを伸ばしていることが確認された。その一方でCALLにおけるモバイルラーニング、自動的フィードバック、デジタル教科書などの提示方法によっては、学習意欲が低下する参加者の存在も明らかになった。

大学が指定するeラーニング（単語学習、多読学習）に取り組む際の外発的動機をより自己決定が高い内発的動機につなげるには、ある程度の強制力によりeラーニングを継続させ習慣化させること、教員からのアドバイス、励まし、適切なフィードバックなどの足場掛けが重要となる可能性を示した。

22人のうち、オンライン国際交流プログラムに参加した6人は概ね交流に対してポジティブな印象を持ち、間違いを恐れず英語を使ってコミュニケーションを行う態度を身につけていた。参加動機に最も大きな影響を与えたのは、学習者の意欲を表す概念であるWTCと国際的志向性であった。L2動機づけセルフシステムの観点から、より流暢で積極的なパートナーと交流することで、現在の自己の姿を認識し、理想の自己とのギャップを狭めようとする中で学習意欲を向上させていた。留学による効果には及ばないとしても、教育的価値からオンラインによる国際交流を継続する意義が示された。

本研究から、CALL環境は学習意欲を高め、それはCOVID-19中でも同様であるという結論を導いたが、これが英語を専門としない学生にも応用できるかどうかを調べるため、7章では同様のCALL環境を備えた大学生に対してアンケート調査を行い、英語を専門とする学生の結果と比較した。その結果、専攻、学年、大学の違いが内発的動機に影響しなかったことから、CALLは、環境が整っていればEFL大学生の学習意欲に良い影響をもたらす可能性があることが示唆された。

第8章で研究課題に対する解答を導き、第9章で全体の研究の要約を行った。研究が大学英語教育に果たした貢献として、上記に示した研究結果に加え、質的研究と量的研究を結びつけることで、eラーニングに対する態度と学習効果の関係について明らかにできたことを述べた。最後に研究の限界点について言及し、今後の研究についての展望を述べた。